

浮気妻の制裁

第二卷 隣人の調教

海老沢 薫 著

## 内容

- 著作権について
- まえがき
- 第一章 隣人の前で自慰

※ 海老沢薫 BLOG

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ 『羞恥』 『露出』 『辱め』 をテーマにした小説シリーズや、各種コンテンツ情報などを配信。

■ 著作権について

「浮気妻の制裁 第二巻 隣人の調教」(以下本書と表記する)の著作権は「海老沢薫」(以下本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています)。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段(印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダ)により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第61条などの罰則がありますのでご注意ください。

い。

■ まえがき

平日の昼間に自宅マンションで夫ではない男と浮気している現場を隣の部屋に住む主婦、麻子に見つかってしまった二十四歳の若妻、白石萌々。

浮気現場を盗撮した動画をネタに麻子から脅迫された萌々は、麻子の指示で素っ裸のまま部屋を出て隣家を訪問した。

四十代の主婦、麻子は自分よりも圧倒的に若く美しい萌々に対して以前から同じ女性として嫉妬し、その思いを晴らすべく、自宅に素っ裸でやって来た若妻を辱めようとする。

ソファに座って目の前にいる麻子の顔を見つめながら自慰行為を強要される萌々。萌々は同性に恥ずかしい姿を見られる屈辱に喘ぎながら、だんだん妖しい快感に溺れていった。

「ああん、見ないでください。・・ああん」

絶頂が迫っているのを感じた萌々が必死に許しを乞うと、麻子はその姿を面白そうに眺めた。

やがて、素っ裸の若妻は隣家の主婦の見つめる前でメスの叫び声を上げ、体を激しく震わせながらついに絶頂した。アナタ、昨日ベランダで見た時もそうだったけど、本当に激しいわねえ。まるで発情したメス犬みたいだったわよ」麻子がそう言っていて嘲笑うと、快感の余韻に浸っていた萌々はどうしようもない羞恥に心が張り裂けそうになった。しかし、陰湿な隣人はこれくらいで若妻を許そうとはしなかった。麻子は今度はベランダに出て自慰行為をするよう命じ、弱みを握られ逆らう事のできない萌々は仕方なく素っ裸のまま隣家のベランダに出た。而して、あまりに卑猥で屈辱的な若妻のストリップショーがついに幕を開けるのだった。

■ 第一章 隣人の前で自慰

自宅マンションの隣の部屋で二十四歳の若妻、白石萌々は素っ裸で隣家に暮らす秋元麻子と向かい合っていた。麻子は全裸の若妻の羞恥心を煽るような質問を次々と投げ掛け、萌々が顔を真っ赤に染めて体を震わせる様子を楽しんでいた。昨日の昼間、自宅マンションにアプリで知り合った男を呼んで、あろうことかベランダで性行為に興じていた萌々は、その様子を隣家に住む麻子に盗撮されていたのだだけ。単に浮気現場を目撃されてしまっただけで、絶対する姿までを盗撮されてしまった萌々は、その動画をネタに脅迫されると、もう隣家に住む麻子の奴隷になるしかなかった。早々に他の男を家に連れ込んでベランダでエッチするなんて信じられない。アナタみたい

な淫乱な女が隣に住んでいると思うとゾツとするわー

麻子は目の前で羞恥に震える全裸の若妻をいたぶるように言葉責めにした。

「ご、ごめんなさい・・・」

萌々は俯きながらただ謝るしかなかった。

誰がどう考えても悪いのは、既婚者であるにも関わらず平日の昼間に夫ではない男を自宅に連れ込んで、ベランダで裸になって性行為をしていた自分なのだ。どれだけ責められ、でも萌々には反論することなどできなかった。「私がアナタのその淫乱な性根を叩き直してあげるわー」

麻子は大声でそう怒鳴ると、目の前のテーブルを強く叩いた。

萌々は、隣家の奥さんの初めて見る恐ろしい姿に驚き、素っ裸の体を震え上がらせた。

「とりあえず、アナタがどれくらい淫乱なのか知りたいから、そこでこつちを向いたままオ○ニーしなさい！」

麻子はそう命じると、腕組みしながら全裸の若妻を見つめた。「そんな・・・」  
あまりに屈辱的な命令に萌々は戸惑いを隠せなかつた。幾ら自分が浮気をしていた最低の女だとしても、人としての尊厳まで奪われるわけにはいかなかった。「どうぞしたの？ サツサとやりなさい。できないのなら、あの動画をご主人に見せてもいいのよ」  
萌々がいつまでも困惑した様子で俯いていると、麻子は少し苛立った口調で脅迫した。「お願いです、それだけは許して下さい」  
追い詰められた萌々は、目の前で腕組みする麻子に向かって泣きそうな顔で懇願した。「よその男と浮気しているような淫乱女が何を言っているのよ！ ほらサツサとオニ―しなさい！」  
麻子が大きな声で捲し立てると、萌々はもう覚悟を決めるしかなかった。



隣家を素っ裸で訪問しただけでも死ぬほど  
恥ずかしいのに、このうえ隣家の奥さんの目  
の前でオ○ニーするなど萌々には考えられな  
かった。しかし、麻子が動画をネタに再び脅  
迫すると、萌々はついに右手を剥き出しの股  
間へと伸ばし、指を秘部に挿入して弄り始め  
たのだった。  
「あぁん」  
他人の目の前で秘部に指を入れた萌々は、極  
限の羞恥に思わず喘ぎ声を漏らした。  
「左手でオツパイを揉みなさい。それから顔  
を上げて、私の目をちやんと見ながらイクま  
でやるのよ」  
麻子がそう告げると、萌々は羞恥に震えなが  
ら左手を豊満な乳房に伸ばし、続いて顔をゆ  
つくりと上げていった。  
「いやぁん」  
麻子と目が合った萌々は溜らず恥ずかしい声  
を漏らし俯いた。  
隣に住む年上の主婦が自分のはしたない姿

を 見 て い る と 思 う と 、 今 す ぐ こ こ か ら 逃 げ 出  
し た い 衝 動 に 駆 ら れ た 。  
「 何 し て る の ! ち ゃ ん と や り な さ い ! 」  
麻 子 が 声 を 荒 げ る と 、 萌 々 は 仕 方 な く も う 一  
度 顔 を 上 げ て い っ た 。 そ し て 上 目 遣 い で 麻 子  
の 顔 を 見 つ め 、 右 手 で 秘 部 を 弄 り 、 左 手 で 乳  
房 を 揉 み 始 め た 。  
「 あ あ ん 、 あ あ ん 」  
萌 々 は 麻 子 の 目 を 見 つ め な が ら 喘 ぎ 声 を 放 つ  
た 。  
そ れ は 若 妻 に と っ て ま さ に 羞 恥 地 獄 に 他 な  
ら な か っ た 。 他 人 の 顔 を 至 近 距 離 で 見 つ め な  
が ら 全 裸 オ 〇 ニ ー を し て い る こ と が 信 じ ら れ  
ず 、 悪 い 夢 な ら 早 く 覚 め て 欲 し い と 願 っ た 。  
「 ほ ら 、 目 を 逸 ら さ な い ! 」  
萌 々 が 恥 ず か し さ の あ ま り 一 瞬 で も 視 線 を 逸  
ら す と 、 麻 子 は 容 赦 な く 責 め 立 て た 。  
そ の た め 、 萌 々 は 秘 部 と 乳 房 を 弄 り な が ら  
ず っ と 麻 子 の 目 を 見 つ め 続 け る こ と に な り 、  
羞 恥 と 快 感 の 狭 間 で 気 が 狂 い そ う に な っ た 。

「ああん、見ないでください・・・ああん」  
入った。  
くなるのを感じ、秘部と乳房を弄る手に力が  
くなるのを感じ、秘部と乳房を弄る手に力が  
見られてしまうことになるのだ。  
アに座って全裸オニーする恥ずかしい姿を  
萌々はそれを想像すると下半身が急に熱  
た。もしも今、彼が家に帰ってきたら、ソフ  
生の息子が帰ってきてもおかしくない頃だっ  
た。確かに時間的に考えてもうそろそろ高校  
麻子の言葉を聞いた萌々は急に焦りを募らせ  
した麻子がそう言っていて絶頂を促した。  
た頃、一向にイク気配のない若妻に業を煮や  
萌々がオニーを始めてから十分近くが過ぎ  
じやない。もっと本気でやってよ」  
「ちよつと、早くしないと息子が帰ってくる  
いて行こうとしていた。  
喘ぎ声が漏れ、若妻の体は確実に絶頂へ近づ  
萌々の半開きになった口元からは絶え間なく

だんだん絶頂へと迫っているのを感じた萌々  
は、目の前で腕組みする麻子の顔を見ながら  
そう呟いた。  
「イクまで絶対に目を逸らすんじゃないわよ  
もし逸らしたら、今度はベランダに出てやっ  
てもらおうわ」  
麻子がそう告げると、それまで快感に喘いで  
いた萌々は思わず表情を強張らせた。  
絶対に見つめながら秘部と乳房を弄り続けた。  
萌々は自分にそう言い聞かせ、麻子の目をじ  
つと見つめながら秘部と乳房を弄り続けた。  
「ああん、もうダメえ・・あああん、イク  
う」  
萌々は目の前で腕組みする麻子の顔を見なが  
らそう呟いた。その瞬間、恥ずかしさのせいか  
視線を麻子から逸らしてしまったのだった。  
「あああん、イクっイクっイクっイクっうう  
萌々はすぐに視線を麻子に戻すと、断末魔の  
叫び声を上げ下半身を痙攣させてついに果て  
たのだった。

束の間、ソファに座ったまま快感の余韻に浸っていた。萌々は、麻子の呼びかけで目を開いた。  
「アナタ、昨日ベランダで見た時もそうだったけど、本当に激しいわねえ。まるで発情したメス犬みたいだったわよ」  
麻子が興奮した様子でそう感想を漏らすと、萌々の意識は一気に現実に引き戻され、慌てて両手で体を隠して羞恥に喘いだ。  
「でも残念だったわね。アナタ最後の最後で私から視線を逸らしたから、約束通り罰として今度はベランダに出てオ○ニーしてちょうだい」  
麻子は不敵な笑みを浮かべながら、震える若妻にそう宣告した。  
「そんな・・・」  
萌々は麻子の顔を思わず睨みつけた。確かにイク直前に視線を逸らしてしまったのは事実だが、まさか本当にベランダでのオ○ニーを命じられるとは思ってもいなかっただ。

「ほら何してるの、早くしないと息子が帰っ  
てくるでしょ！」  
萌々がソファに座ったままじっとしていると  
麻子は強い口調で命じた。  
もう隣家の息子がいつ帰ってきてもおかし  
くない時間になろうとしていた。素っ裸で何  
も持たずにこの家にやって来た萌々は、こん  
な姿をもし隣家の息子に目撃されたら何と言  
い訳すれば良いか分からなかった。早くしな  
いと・・・。。一気に焦りを募らせた萌々は、  
目の前に座る麻子を恨めしそうに見つめた後  
ソファから立ち上がりベランダの方に歩いた  
そうして窓を開け、素っ裸のまま隣家のベラ  
ンダに出た萌々は、どうしようもない羞恥と  
恐怖に襲われた。  
一部屋の方に向かって脚を大きく開いて座っ  
て、さっきと同じように私の顔を見つめなが  
らオツパイとアソコを弄りなさい」  
麻子が部屋の中からそう命じると、萌々は言  
われた通りのポーズを作っていた。

「いやぁん」  
他人の家のベランダに全裸大股開きで座り、  
部屋の中にいる住人の顔を見つめながらオ○  
ニ―する、それは若妻に計り知れない屈辱と  
共に未知なる快感をもたらした。  
麻子がすぐに窓を閉めたため、萌々は素っ  
裸で隣家のベランダに幽閉された形になり、  
まるで牢獄の中でオ○ニ―しているような気  
分だった。  
「あぁん、あぁん」  
萌々は部屋の中で寛ぐ麻子の顔を見つめなが  
ら、再び禁断の快楽に溺れようとしていた。